
彼と彼女の思惑

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の思惑

【Nコード】

N9653X

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

割とマイペースな葵と、器用貧乏な繭子。お隣の家に住んでいた繭子が、遠くの街に引っ越すことになった。葵は、繭子は、いったい何を考えているんだろうか。なんとなく微妙な距離感の2人と水面下でやきもきしたり空回ったりする女の子を見て、にやりとするお話。かな？

彼の思惑 1

繭子は、かわいらしくめそめそ泣いたりしない女だった。いつも気丈だったわけではないが、いつでも自分の中に冷静な部分を持って過ごしているように見えた。小学校の卒業式も、友人の引越す時も、笑ったり悲しんだりと決して無感情そうには見えなかったが、周りの女子に交じって抱き合って泣くことはしなかった。思い返してみると近所のいじめっ子に殴られた時も、冷静に『痛いんだけど』とか言つて、逆にいじめっ子たちをビビらせていたような気がする。

「あたし、引越すことになったから」

繭子にそう告げられたのはもう卒業も間近に迫った、中3の日のことだった。こちら辺のやつらは、大体が隣町にある公立高校へ行き、あまり成績の思わしくない人は、そのまた隣町にある公立か、裕福ならば私立に行ったりもする。そういうわけで、俺は今日この瞬間まで当然繭子も俺と同じ隣町の高校へ進学するのだらうと思っていた。思っていた、というよりは、それは俺の中では決定事項だったのだ。

繭子が、引越す。つまり俺たちの腐れ縁も、終わるということか。予想すらしていなかった言葉に俺は一瞬驚いて、思わず歩みを止めてしまった。隣を歩いていた繭子が、いきなり立ち止った俺に珍しいものを見るような視線を向けてくる。

「引越すって、お前高校は？」

生まれたときからの幼馴染が引越すというのに、俺はそんなありきたりなことを聞いてしまった。ちょっと薄情だろうか。しかしとつさにそう思ってしまったのだから仕方ない。

「ちゃんと受けてる。引越すことは春から薄々決まってたし。レベル的にはここの高校とおんなじくらいだし、受験票書くころにはもちろん決まってたけど」

また2人並んで歩きながら、さくさくと雪を踏む。

俺たちは生まれたときからお隣同士、という昔からよくあるマンガみたいな関係だったが、言葉から連想されるほど密着した仲ではなかった。昔は一緒に学校へ行ったり公園で遊んだりもしたもののだが、小学校高学年くらいになるとお互い同性の友達と遊ぶ方が多くなり、中学に入って部活動に勤しむようになる、学校以外で顔を合わせることも珍しくなっていた。まあ偶然会った帰り道では普通に一緒に帰ったり、時々母親に頼まれて届け物に行ったりもしていたし、決して仲が良くないわけではなかったが。

「どこに引越すんだ？」

繭子はここから電車で5時間はかかる、ここよりずっと栄えているであろう県の名前を口にして、父の仕事の都合だから、と言った。そっか、残念だな、と俺が答えたところで、家が見えてきた。

「卒業式には出るんだろ？」

「うん。式の次の日行くことになってる。多分みんなで挨拶に行くと思うからよろしくね」

そのままなんだかあっけなく別れて、家に入った。何故今まで引越すことを黙っていたのか気になったが、そのことについて繭子が全く補足しないので、なんとなく聞きにくかった。繭子はきつと、俺がそのことについて不思議に思っていることは、気づいている。その上で口にしなかったのだ。何故かはわからないが。

母親に繭子が引越すことを知っていたかと聞くと、あんた知らなかったの、と驚かれた。

「長いお付き合いだったのに、残念ねえ。寂しくなるわ。でも明日は家で倉田さんとお茶することになってるのよ。今のうちにたくさんしゃべっとかないとね」

うちの母親と繭子の母さんは、これまた仲がいい。話し好き同士、気が合うのだろう。

制服を脱ぎ、ベッドに寝転んでぼうつと天井を見上げた。もうすぐ繭子がお隣のお嬢さんではなくなるのか。なんとなく感慨深い

ものがある。隣の家は、そのまま誰かが住むことになるのだろうか。
倉田家ではない人たちが、隣の家に住む。それはなんだか、とても不自然なことに思えた。

彼の思惑 2

「アオイ、お前との長い3年間も、今日で終わりだなあ！泣くな相棒よっ！」

「あー、はいはい」

卒業式当日、クラスはいつもより浮足立っていた。黒板には女子が書いたのだろうか、『卒業おめでとう！みんな大好き！』と、丸っこい文字が綺麗に縁どられていた。吹奏楽部のリハーサルが、少しだけ漏れてくる。

「なんだよつれねえなー！もうちょっとなんかあんだろー！」

「うるせーな、何もねえよ。どうせ高校も一緒だろ」

「中学のオレと高校のオレは違うの！」

馬鹿みたいな声を出して、美鳥が机をバシバシ叩いた。この日野美鳥とは中学で知り合ったのだが、いつも馬鹿みたいなことを馬鹿丸出しでやっている、本当に馬鹿な奴だった。それでいて成績はかなり良く、ついでにクラスのムードメーカーでもあった。

俺の中学3年間は、美鳥に巻き込まれる形で大変騒がしいものとなってしまったが、自分とは正反対な美鳥と一緒にいるのは思いのほか楽で、楽しいものだった。……調子に乗るので、本人には絶対言わないが。

俺の前の席に後ろ向きで座っていた美鳥は、なんだよつれねえなあ、とわざとらしく拗ねて、それからふと思い出したように俺を見上げた。

「そっついやーさ、繭子ちゃん引越すんだろ、寂しくなるよなー」

「は？お前知ってたのか？」

意外な人物から意外なことを聞いて、俺は素っ頓狂な声をあげてしまった。

「知ってるも何も。昨日朱里が一晩中泣いて泣いて泣いて、お兄ちゃん慰めるの大変だったんだからー。まあ泣いてる朱里はかわいか

ったけどさ」

そういうことか。美鳥には双子の妹がいて、繭子と同じクラスだった。妹の朱里の方は美鳥ほど勉強は得意ではなかったし、運動は苦手で、というかはつきりいって鈍くさかったが、おっとりとした優しい女の子で、俺も何度か話したことがあった。繭子と日野さんは同じクラスで、よく一緒にいるところを見かけた。

「朱里も繭子ちゃんにべったりだったからなあ。お前だって幼馴染なんだろう、寂しいよなあ、そりゃあ」

美鳥が珍しくしんみりと言ったので、俺も思わずそうだな、なんて言ってしまった。

事実として考えると、きっと寂しいことなんだろうと理解はできる。が、正直実感がなくて寂しいとは思えなかった。いなくなるのか、なんか変な感じだな。多分それが俺の感じている本当のところだろう。

「美鳥ー、ちょっとシャッター押してくんねえ？」

隣のクラスの奴らが、廊下から顔を出して大声で言った。

「おいおい、この美鳥ちゃんを撮らずして何を撮るって言うんだよ！オレも混ざってやるよ！」

「うつせー、おまえはいらねーよ！」

なんだと、と美鳥はにやにやしながら廊下へ駆けていく。廊下から楽しそうな笑い声が響いた。

「葵、俺らも撮ろーぜ。おい美鳥ー、それ終わったら次こっちのシャッター押せよー！」

「バカっ！もうお前らなんて知らないからっ！オレ泣いちゃうからっ！」

美鳥が言って、ぎやはは、とみんなが笑った。俺も笑った。

ただ、さっきのなんだかよくわからない変な消失感みたいなものが、しこりのように心に引っかかっていた。

繭子はかわいらしくめそめ泣いたりはしなかったが、同じくらい感情をあらわにして怒ったり、焦ったり、落ち込んだりしたところを見たことがなかった。俺もどちらかというと表情豊かとは言い難いタイプだったので、小さいころの俺たちはさぞかし可愛くない子供だっただろう。

「先輩、卒業おめでとうございます！先輩がいなくなるなんて寂しいです！」

「わたしたちもすぐ同じ高校行くんで、忘れないでくださいね！」
式が終わった後、俺は陸上部の後輩に写真をせがまれていた。小学校へ入って、中学を卒業して、こうしてみると、俺や繭子のように表情が豊かでない人種の方が、むしろ少数派なのだということに気づかされた。学校の奴らは、みんなくるくる表情が動いて、たくさんしゃべる。特に女子はそれが顕著で、何かあると笑ったり泣いたり、怒ったりと、忙しく表情を変えていた。

「先輩、一緒に写真撮ってください。美鳥先輩、シャッターお願いします！」

「え！？なにそれオレはいいの？オレ泣いちゃうよ！？」

俺と同じく陸上部の美鳥が、朝と同じようなやり取りをして笑われていた。——やっぱり、忙しないのに男女は関係ないのかもしれない。

「美鳥せんぱーい、私たちと撮ってくださいーい！」

「おおー！かわいい後輩よ！今行くよーう！」

こうしてみると、俺の周りって案外賑やかだったんだな。

きつとあと何年かもすれば、この3年間も思い出さくないほど青臭くって、でも笑えてしまうものになるんだろう。

俺は馬鹿みたいに笑う美鳥の顔を見て、そんなことを思った。

彼の思惑 3

夕陽の沈むころ、俺はいつもの帰り道を歩いていた。3年間通った道を制服で歩くのは、今日が最後になるだろうか。ちよつとセンチメンタルな気分になった。

ふと足を止め、家までの最短経路をそれて、わき道へ入ってみた。部活帰りにはよく、この先の小さな商店街でコロッケや何かを買って、公園で食べてから家に帰ったりしていた。家までは結構距離があるので腹が持たなかったというのもあるし、肉屋のコロッケと冬だけやっている肉まん屋の肉まんがうまかったので、つい買い食いしてしまうのだ。

高校は逆方向になるので、ここで買い食いする機会もきつと減るだろう。そして、俺ではない誰かが、ここで買い食いをして家に帰って行くのだろうと思った。

コロッケと肉まんどちらにするか迷って、最後だから両方買った。紙袋から温かさが伝わってきて、冷たい掌を温めてくれた。

公園に行くのは久しぶりだった。そういえば、部活を引退してからは初めてかもしれない。俺が公園へ行っていたのは、食べながら歩くのは行儀が悪いからとかそんなお上品な理由ではなくて、ただ単に部活で走って疲れていたので、少しの休憩の意味を込めてのものだった。寂れた公園で、木に覆われているので、気をつけて見ないとそこにあることすら気づけないような場所だ。いつも部活帰りで時間が時間だから人がいるのを見たことがなかったが、俺はその公園を結構気に入っていた。小さなベンチに座って空を見上げると、たくさんの木々に包み込まれたような星空が、とても綺麗に見えるのだ。

公園に着いて、俺は驚いた。いつもは誰もいないはずのそこに、人が座って空を見上げていた。そしてそれは繭子だった。

「繭子」

俺が声をかけると繭子は振り向いて、少しだけ目を見張った。

「葵？何でこんなところにいるの？」

「それは俺が聞きたいぐらいなんだけど……。隣いいか？」

どうぞ、と繭子はちよつと端へ寄って、ベンチに薄らと積もっていた雪を払った。今は雪も止んでいるので最初から積っていたのだろつ。

「まさか繭子もここを知ってるとはな」

「それはこっちのセリフ。かなりの穴場だと思ってたんだけどなあ」

繭子は少しだけ笑って、空を見上げた。

「冬は夏より星が綺麗ね」

俺もつられて空を見上げた。木々の上に積もった雪が、夏とはまた違って星空を幻想的に見せていた。そういえば、冬はあまりここに来たことがなかったかもしれない。冬の練習は夏ほどきつくないし、やっぱり寒いので、なるべく早く家に帰りたいと思っていたからだろうか。

「今日ね」

繭子そのままこっちを見ずに言った。

「朱里がすごい目腫らしてきたの。しょうがないから一緒に保健室行つて、冷やしてもらったら大分良くなったんだけど」

「ああ、美鳥が言つてた。昨日は泣いて大変だったらしいぞ」

「ふふ、日野君も大変ね。しかもそのあと後輩の子に告白されて、あの子また焦っちゃって、『私は繭子ちゃんのことを大好きだからお付き合いはできません』とか言つて、誤解されて半泣きになつて、もう最後までやらかしてくれたわ」

「ああ……。かなり想像できるな」

でしょ、と繭子は笑つて、でもその顔はやっぱり少し寂しそうに見えた。白い息を吐いて、繭子は視線を下げると、しっかりと俺の顔を見た。

「あんたとも付き合い長かったけど……。結構楽しかったわ。特に小

学校の帰り道であんたが側溝にはまったときとか、上から降ってきたバケツの水で身体半分だけ水浸しになったときとか……」

「おいまて、お前だつて転んで田んぼに落っこちておたまじゃくし飲み込みそうになったり、ボール追いかけて土手転げ落ちたりしてただろ！」

「あのときの葵、ものすごい顔して走ってくるから面白かつたわ」

「当たり前だろ！なのにお前ときたら『いたたた……ぶ、葵そのか
おもしろいよ』とか言いやがるし！」

「自分だつてドツチボールで顔面直撃して脳震盪で倒れたとき、心配してたあたしに目覚め早々『お前、アホ毛立ってるぞ』とか言ってきたじゃない！」

「それならお前だつて……！」

しばらくやいやいと言い合っていると、忘れていた、むしろ忘れ
たかつたような珍事件をたくさん思い出してしまつて、おかしくな
つて笑つた。

ひとしきり笑つたあと、繭子は静かに立ち上がった。

「多分大学は西町のところ受けると思うから、縁があつたらまたその
ときにでもよろしく」

西町にある大学もまた、ここらの結構勉強が得意な奴ら、つまり
美鳥や、自分で言うのもなんだが俺なんかの目指す大学だつた。

俺は大学生になつた自分を想像した。美鳥がいて、きつと美鳥に
助けられながら入つた日野さんがいて、繭子がいて。今とあまり変
わらない日常が、きつとそこにはある。

「あたし今日買い物頼まれてるから、そろそろ行くわ。葵も風邪引
かないうちに帰りなさいよ？」

繭子はきゅつとマフラーを結びなおすと、鞆を手に立ち上がった。
「どこのスーパー行くんだ？もう暗いし、送つてくよ」

俺も立ち上がると、ズボンをほろつて言つた。どうせ家は隣なの
だ。うちは結構放任だし、今更多少遅くなつても文句は言われない

だろう。むしろ、ここで一人で帰った方が『女の子一人送って来れない甲斐性無しに育てた覚えはない！』とどやされるに違いない。

「まだ早いし、他にも寄りたいところあるから大丈夫。遅くなったらお母さんも迎えに来てくれると思うし」

「寄り道ぐらい別にいい。冬は暗くなるの早いんだから、あんまり一人でうるちよろしない方がいいぞ」

今だって十分暗いのだ。親切に俺がそういうと、繭子は目線をちよつとだけ下げた。

「本当に平気よ。すぐ帰るから。あんたは黙ってお家に帰って、その取れちゃったボタンの跡でも眺めてなさい」

繭子の視線を追うと、姿を消してしまった第二ボタンのあったところにたどり着いた。繭子は面白そうににやにや笑っている。こんにやろう……。

「——おい」

「おモテになる葵君なんかに送ってもらっちゃったら、女子たちに恨まれちゃうものね。それじゃあまた明日」

からかうようにそう言うと、ひらひら手を振って俺に背を向けた。それはそれは、流れるような美しい一連の動作だった。肩につくかつかないくらいに伸びたまっすぐな黒髪が、さらりと音もなく揺れた。スカートは3年の女子にしては長めの、膝よりほんの少し上の長さだった。

繭子は他の女子みたいにスカートを切ったり、こっそり髪を染めたりしないし、噂話よりも本が好きで、どちらとかという少し古風な少女だった。噂や恋の話が大好きな女子たちに上手く馴染めず小学校の頃はいろいろ苦労したようだが、なんだかんで人の良い彼女は、今は割と上手くやっているように見える。

コートの上から巻かれたマフラーの少し上に、空気にされされて赤くなった耳が見えた。きつと正面を向いたら、むき出しの鼻も頬も、同じ色に染まっているだろう。

「おい、待てよ」

「もう、心配性ね、平気だつてば。じゃあね」

振り向いて笑った鼻も、頬も、やっぱり赤かった。もう一度ひらひらと手を振ると、繭子はさっきと同じように、さくさくと雪を踏んだ。

そしてその仕草もまた、目を逸らすのがためられるほど、洗練されていて、流麗であつたのだ。

「繭子」

俺は繭子よりずっと身長が高い。よって、俺が繭子に追いつくのはいともたやすい話だった。さつき下ろされたばかりの左腕をつかむと、繭子はびくつと身体を震わせた。

「あんたもしつこいわねえ。だから、大丈夫だって……」

「繭子、ちよつとこつち向け」

繭子は、もう一度小さく肩を揺らしたが、もう一度繭子、と呼ぶと、しぶしぶといった、実にかわいらしくない動作で、背を向けたままにこちらを向いた。

「……………」

「……………」

繭子が、かわいらしくめそめそと泣いていた。

「……え？」

俺はあまりに驚いて、腕を放してしまった。

繭子が、かわいらしくめそめそと泣いている。繭子が泣くところを見たのはもしかしたら初めてかもしれない。唇はきゅつと引きしめられていて、眉は顰められていたが、目線は決して俺を見ずに斜め下を見ていた。その目から、大粒の涙がぼろぼろと落ちて、雪に小さな穴を穿っていた。

彼の思惑 4

「——せめて、なんか言いなさいよ」

繭子はへの字口のまま言った。

繭子は普段、めったに嘘をつかない。大体的場合において、彼女の言うことは真実であり、本音である。

繭子はいつも周りを見て、気を使いながら行動するやつだったが、それは自分の感情を押し殺しているわけではないというのは、見ていればわかった。ただ昔から、時々繭子の言葉や動作がまるで流れるくらい美しく見えることがあった。そんな時は必ず、何かをこまかそうとしている時だということに気がついたのは、小学校も終わりに近づいてからのことだったような気がする。

「いや、まさか泣いてるとは思わなくて……なんか、珍しいもの見ちまったな」

「何その反応。これはあれよ、昨日読んだ感動的超大作の結末をちよつと……」

「嘘だな」

俺のカンがそう告げている。というか、誰でもわかるだろ。

繭子は声も上げず、涙を拭いもせず、きゅつと眉を寄せてひたすら涙をこぼしていた。声は出さなくせにあんまりぼろぼろ泣くので、ちよつとおかしくなってしまうて、俺は子供に話しかけるように繭子に声をかける。

「まーゆー」

「……………」

ぐつと睨まれた。噛んだ唇が赤くなっている。

「まったく、何ひねてるんだか。」

「どうしたー？ほら、こわくないから言ってごらーん」

俺は少し首を傾げて、おどけたように……いや、むしろなんか変態っぽい言い方だな……。わざとだけど。一応言っておくと、俺は

別に繭子に劣情を抱いたことはないぞ。

「この、ばか、何言ってるのよ」

「え、なに照れてんだよ。お前変わったやつだな」

珍しく言い淀んだ繭子を見て笑うと、繭子はぎゅっと眉を寄せる。それから泣いてる女の子見て笑うなんて、あんたも変わった趣味だわ、とそっけなく言った。泣いているくせに流暢にしゃべるやつだ。「ほらほら、いい子だから言ってるらん。お兄さんが聞いてあげよう。ん？」

顔を覗き込むと、ぎゃ、と言ってまた目を逸らした。

「まーゆ、まゆちゃん。まったく、なーに泣いてんだよ」

そういえば小さい頃は、まゆ、あおくん、なんてかわいらしい呼び方をしていた。いつの間にか、繭子、葵、なんてお互い大人ぶって呼んでいたが。

あおくん、と今の繭子が俺を呼ぶところを想像する。――結構面白い。

「ちょ、ちょっと、寂しくなったのよ。いろいろ思い出して、寂しくなったの。高校に行ったら、朱里もいないし、隣にあんたもいない。それで、あんたたちは、あたしのいない高校で、彼女作ったりしながら、面白おかしく過ごすのかって、思ったら、ちょ、ちょっと、さみしくなったの。それだけ。こ、子供みただけど、仕方ないじゃない」

そろそろ少しだけしゃくりあげながら、それでも泣いているにしては落ち着いた様子で繭子は言った。目線はまた斜め下に逸らしてしまったが、その手がとても落ち着かなそうにスカートを握りしめ、そんな自分に気づいてはっと手を離すということを繰り返していた。ちら、とこちらを見たときには繭子の顔を見ていたので、恐らくバレていないと思っているだろうが、残念だな。

「そっか、俺に会えなくなるのがそんなに寂しいか、ははは。お前もちよつとはかわいらしいところあったんだな」

「そりゃあ、10年以上お隣だったんだし、当たり前でしょ」

落ち着き払って言う、その手は再びさまよっていた。なんだが、甘え慣れてない小動物を見ているようだった。

「うん、よしよし。泣け泣け、もっと泣け」

繭子の正面に回り込んで、髪を両手でわしゃわしゃと撫でてやると、指に触れた頬は思いのほか熱かった。繭子をはじめ『わ、髪！ぐしゃぐしゃになる！』と逃げ出そうともがいていたが、そうすると俺が腕をつかんでさらに引っ張るので、観念したようだ。

「はは、ゆき、ぬくいな」

繭子の頬は火照っていて、俺の冷え切った指先には心地よかった。うつむいた繭子の睫はつややかに影を落としていて、ああ、女の子だなと思った。さっきよりも大粒の涙をこぼしながら時々しゃくりあげる姿は、いつものしっかりした姿とは程遠い、ただの小さな女の子に見えた。そしてそう思ったことに、自分自身驚いた。

彼の思惑 5

ひとしきり泣いたあと、2人ですっかり冷え切った肉まんとコロッケを食べながら、一緒に帰った。面白いのでお使いはいいのかと聞こうかと思つたが、今日の繭子にそんな事を聞いたら逃げ出してしまいそうなので、やめておいてあげた。うん、俺って優しいな。

けれど俺の隣を歩く繭子はなんだかおかしく、いつもの倍くらいいろいろなことをずっと一人でしゃべっていた。ふらふらと車道に出そうになったり電信柱にぶつかりそうになったりとても危なっかしかったので、思わず手首をつかむと、ぎゃ、とまた小さく叫んだ。そしてそこから家につくまで、一言もしゃべらなかつた。

「葵君、いままでありがとねー。こんなカツコイイ子がお隣さんでおばさん嬉しかったわあ。高校でもがんばってね」

「はい、おばさんもお元気で」

次の日、朝早くに繭子たちは引越していった。繭子はすっかりいつも通りの様子に戻って、家の父さんと母さんに礼儀正しく頭を下げていた。

「達者にやんなさい。たまには連絡するわ」

俺にはそんな婆さんみたいなことを言つて、ものすごく綺麗に笑つて見せた。

昨日のことを素直に口に出して『昨日は迷惑かけたわね』なんて言うのと、まるで何もなかつたような素振りで別れるのと、どちらがいいか一生懸命考えて、練習してきたのだろうか。けれどいつもなら確実に前者を選択する繭子が後者を選んだことが、彼女の動揺ぶりを表していてちよつと笑ってしまった。

去つていく車を見ながら、俺は自然と微笑んだ。もう1月もすれば、高校が始まる。きっと繭子は、何度も何度も考えて、迷い尽く

してから連絡をしてくるのだろう。

その前に、俺から連絡をしてやらないとな。優しい俺はその時の彼女を想像して、そしてもう一度笑った。

彼の思惑 5（後書き）

これで葵視点のお話はとりあえずおしまいです。次は同じ話での繭子視点になります。こちらとは多少違う感じになるかと思いますが、そちらも含めて1つの話になっているので読んでいただけると嬉しいです。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

彼女の思惑 1

中途半端に頭の良い人間は、日常生活を送る上で、大変損をすると思う。そう思ったのは、中学に入っただばかりの頃だっただろうか。暖かい、というには勢いを増してきた春の日差しを浴びながら、教室の窓際、一番後ろという誰もがうらやむ席に座り、3年生になった私はぼんやりとしていた。教壇では先生が私たちに背を向け、ひたすら黒板に文字を書いている。

やたらと板書の多い授業に疲れ、ふと窓の外を見た。桜の木が葉を青々と茂らせる中、体育をしている生徒たちが目に入る。もうすぐ行われる体育祭での、クラス対抗リレーの練習のようだ。体育は2クラス合同授業なので、多分あれば3組と4組だろう。クラスで仲の良い朱里あかりの兄である、日野美鳥君がアンカーの位置に立っていた。そして、そのアンカーにバトンを運んでいるのが、まさしく私の幼馴染である椎名葵だった。

「お兄ちゃんと椎名君、タイムがあんまり変わらないらしくてね、じゃんけんで勝った方がアンカーって決めたんだって。お兄ちゃん負けちゃったらしいんだけど、アンカーがいって駄々こねて、椎名君に代わってもらったらしいよ」

「ふーん。でもちようどいいんじゃない？ 葵はあんまり目立つの好きじゃなさそうだし」

「なんかお兄ちゃんも『アオイは縁の下が大好き』って言ってた。でもそれなら、はじめからじゃんけんする必要無いのにね」

変なの、そう言ってふんわりと朱里は笑った。

昼休みになると、女子たちはグループになつておしゃべりを始める。昔はこの雰囲気があるとなく苦手だったが、とげとげしいのは一部だけで、別に全てのグループが仲間を縛り付けておくためだけのものではないということを知ってから、前ほどこの時間も苦痛

ではない。

それに、朱里といるのは好きだった。朱里は勉強も運動も兄ほど得意ではなく、なんだか要領が悪いというか、とにかく危なっかしい子だった。そんな彼女に苛立ったりする人も中にはいたが、私は彼女を好きだったし、尊敬もしていた。

朱里はいつも一生懸命で人のことばかり考えているが、自分の本心を決して見失わない。彼女はいつも『繭子ちゃんは凄いなあ』と言うが、本当は彼女の方がずっと凄いのだ。

「コンクールですか？」

放課後、いつも通り美術室に赴いた私に先生はそうそう、と赤い爪を揺らした。

「今年、初めて行われるコンクールがあつてね、それが1校につき1作品までなのよ。お題は『私の憧れ』ですつて。ふふ、素敵な問題よねえ。うちの3年生つて、あなたと日野さんだけじゃない？ 後輩たちは、是非3年生に出してほしいつて。健気でしょう？」

先生は、ちよつと危ないビデオに出てきそうなほどこてこての女教師で、うちのクラスの男子は美術授業の度に浮足立っている。それを見た女子たちが『男子つて本当に不潔よねー、倉田さんもそう思わない？』と私に話を振ってきたけれど、なんて答えたらいいのかわからないので笑つてごまかしておいた。

けれど、恋の相談にもものってくれる美人な先生は女子からも結構好かれていて、美術準備室は時に、恋のお悩み相談室として開放されていたりもした。——私は画材を取りに行く目的ぐらいでしか、そこへ行ったことはないが。

「日野さんと話してみてる？ あなたたち2人なら、実力も申し分ないと思うわ。2人で描いて、それから決めてもいいし。まあ、もし決まったら教えて頂戴ね」

その日の放課後、朱里に話を見ると、是非私に描いてほしいと言
いだした。

「私ね、繭子ちゃんの描く絵、すごくいいと思うんだ。力強くて、
繊細で」

「朱里、自分のこと下に見すぎだよ。朱里の描く絵、あたし好きだ
よ」

朱里はいつも、私のことを過大評価しすぎなのだ。私は彼女が思
っているほど、素晴らしい人間なんかじゃないのに。

「ううん、そうじゃないの。それがね、もし『幻想』とか、そんな
のだったら私も描いてみたいなって思うの。でもね、私は自分の憧
れって何か、正直言うとかんないの。それに私が得意なのは水彩
画で、ふわってした絵を描くのが好き。繭子ちゃんが描きたくない
なら無理にとは言わないけど、繭子ちゃんの大胆な油絵って、見て
て気持ちいいんだよね。繭子ちゃんは、描いてみたいって思うもの
無いの？」

予想だになかった答えが返ってきて、私は正直驚いた。彼女の
こういう、自分の思っていることをそのまま伝えるところ、そこに
そ私が朱里を尊敬している理由の1つだった。

『繭子ちゃんは、描いてみたいって思うもの無いの？』

私は考えてみた。たくさんの木々、茂る緑、青く高い空。ある寂
れた公園が、私の脳裏に浮かんだ。

「朱里、あたし描いてみるよ。描きたいもの、あるの」

彼女の思惑 2

体育祭は、3組が優勝だった。対抗リレーでは黄色い声援が飛び交い、アンカーの日野君と、その前の葵は大喝采を浴びていた。

「お兄ちゃん、リレー凄かったよ！やっぱりお兄ちゃん、凄く足速いんだねえ！」

「だろだろー！見たか俺の雄姿を！これで学校の女子過半数は俺のとりこだな」

その日の帰り道、偶然会った葵と日野君と、4人並んで帰った。

ふふん、と笑う日野君の頭にチョップを入れて、葵はじろりと睨む。

「なに言ってるんだ馬鹿。ゴール前にあんなことする奴があるか！」

「いいじゃーん、ウケは取れただろ？」

「まあたしかに、笑わせてはもらったわよ」

「だろだろー！」

「椎名君も2人も抜いちゃって、びっくりしたよ！2人ともやっぱり陸上部だなーって思ったよ！」

そう、葵は2人も抜いて、ものすごく綺麗なフォームでバトンを繋いだ。周りから、椎名君ってやっぱりカッコイイねー、私告白しちゃおうかな、きやあー、なんて会話が聞こえてくる中、私は走り終えても、ずっと葵から目が離せなかった。

ふいに目を上げた葵と、ばっちり目が合ってしまった。どうしよう、慌てて逸らすのもおかしいし、あ、もしかしたら遠いから気づいていないかもしれない。それならいっそのまま見ていようか、なんて思っていると、葵がにやり、とこっちを見て笑った。

うわあ、うわあ、と心の中で叫んだが、その間にも頭はきゅるきゅる回って、気づくと私も不敵に笑い返していた。ピース付きで。

そのまま葵は振り向いて、日野君を応援し……ようとして、もう間もなくゴール寸前というところで盛大に投げキッスを放った日野君を殴りに、ゴール地点まで猛ダッシュしていった。

私はピースをへなへなと下げると、殴りあっている2人を見て『仲良しだねー』と屈託なく笑う朱里に、力なく笑いを返した。

中途半端に頭の良い人間は、日常生活を送る上で、大変損をすると思う。それは、恋愛においては、殊更顕著に顕れる。

私は一旦筆を止め、ベンチの上から空を見上げる。ここから見た空は、学校の屋上から見るとそれよりも、ずっと高く、遠くまで続いているように見える。ここは公園というより、森の中を四角く切り抜いて、そこにベンチと申し訳程度の遊具を放っただけみたいな場所だった。

視界の中で、高く伸びた木々が、空を四角く見せていた。何故だかはわからないけれど、切り抜かれた空というより、包み込まれた空のように、私には見える。

なんとなくぶらぶらしていた中学2年の夏に、私はこの公園を見つけた。それ以来時々、このベンチに座り青空をぼうつと見上げたりするのが私の楽しみだった。初めてここを見つけた日、あの日も私は今日と同じようなことを考えていた気がする。

私は昔から、割と冷静な方だった。その上、考えていることがあまり表情に出ないようで、いつも落ち着いているね、とよく言われていたし、自分でもそう思っていた。

一体何時からなのか、自分ではわからない。けれど、気づくと私は決して冷静な少女ではいられなくなってしまうていたのだ。

学校帰り、偶然葵と出くわしたときや、チャイムが鳴ってドアを開けた瞬間に葵の顔があったとき、私は正直猛烈に焦ってしまうようになっていた。ものすごく心の中ではパニックになって、わけのわからない感情が渦巻くどころかハリケーン状態なのに、頭のどこか一部はやけに冷静で、とんでもなく自然に話をしていたりする。まさに完璧に自然に、いつも通りの自分を演じることが、私には出来るのだ。

わかつている。わたしはきっと、長年きょうだいのように育ててきた葵に、女の子らしい反応をすることを、とてつもなく恥ずかしいと思っているのだ。

『寂しい？』

『寂しくない！』

『はは、そんな泣きそうな顔で言っただけでわかるよ、強がりだなあ』
近頃クラスで流行っているらしい恋愛小説に、たしかそんな展開があった。私は朱里に少しだけ見せてもらったが、なんだか途中で読む気を失って止めた。

まさか葵とそんなやり取りをしたいとは思わないが、私がもう少し感情をコントロール出来ないおバカさんだったら、もしくはそこまで計算してしまえるほど頭が良ければ、きっとこんな不毛な現実には訪れなかったろうに。

中学3年の夏の終わり、私たち一家は引っ越すことに決定した。それを葵に告げることができたのは、引っ越す1週間前のことだった。もしかしたらおばさんに聞いて知っているかも、と思っていたが、そんなことはなかったようだ。うちのお母さんあたりがまた、よいけいな気でも回したのだろうか。――あまり考えたくはない。

葵は結構びっくりしたようだったが、そっか、残念だな、と言われた。そりゃあ、こんなに長く付き合っていたんだからそれくらい思ってくれないとね、なんて言いながらも、ほんの少しだけ嬉しかった。そして、その何倍も悲しくなった。

「繭子ちゃん、寂しいよう」

卒業式当日の朝、朱里はかつてないほど瞼を腫らして登校した。

「うわっ、あんたなんて目して……ほら、いいから保健室行くよ」

朱里の手を無理やり引いて廊下に出ると、隣のクラスから笑い声

が聞こえてきた。目を向けると、葵が日野君やクラスメートと笑いながら写真を撮っていた。

——ああ、幸せそうだ。

葵は中学が上がってから、前より良く笑うようになった。きっと日野君のおかげだろう。この双子は、なんとなく人を幸せにしてくれるオーラみたいなものが出ている気がする。

日野君や、朱里や、葵がこれから、幸せであってくれたらいいと思う。いや、きっと幸せな高校生活を送るに違いない。

私も、頑張らなきゃな。

「繭子ちゃん、私勉強頑張るから、絶対同じ大学行こうね！あ、でももし他にどうしても行きたいところできたら、遠慮しちゃだめだよ。でもその時は、ぜったいぜったい教えてねっ！」

私は間拔けな瞼のままそう言っただけで涙ぐむ彼女に向かって、思わず微笑んだ。

彼女の思惑 3

「繭子ちゃん、寂しいよう」

卒業式当日の朝、朱里はかつてないほど瞼を腫らして登校した。

「うわっ、あんたなんて目して……ほら、いいから保健室行くよ」

朱里の手を無理やり引いて廊下に出ると、隣のクラスから笑い声が聞こえてきた。目を向けると、葵が日野君やクラスメートと笑いながら写真を撮っていた。

——ああ、幸せそうだ。

葵は中学に上がってから、前より良く笑うようになった。きつと日野君のおかげだろう。この双子は、なんとなく人を幸せにしてくれるオーラみたいなものが出ている気がする。

日野君や、朱里や、葵がこれから、幸せであってくれたらいいと思う。いや、きつと幸せな高校生活を送るに違いない。

私も、頑張らなきゃな。

「繭子ちゃん、私勉強頑張るから、絶対同じ大学行こうね！あ、でももし他にどうしても行きたいところできたら、遠慮しちゃだめだよ。でもその時は、ぜったいぜったい教えてねっ！」

私は間抜けな瞼のままそう言っただけで涙ぐむ彼女に向かって、思わず微笑んだ。

いつも描いていた青空の、夜の姿はどんなだろうか。帰り道、あの公園に立ち寄ったのは、そんな事を思ったからだだった。

私の描いた絵は、めでたく入選した。小さい賞ではあったが、素直に嬉しいと思った。

部のみんなも喜んでくれて『今日は無礼講よ！』とばかりウインクした先生がお菓子パーティーを開催した。卒業パーティーも兼ねたそれは大いに盛り上がり、人生初の告白されてゴメンナサイ、そ

してあらぬ疑い（私のことが好きなのでは、という）をかけられるという貴重な経験をしてしまった朱里も、すっかり元気を取り戻していた。最後にはまた泣いていたが。

ベンチの雪をほろって、空を見上げる。空は晴れていて、澄み切った冬の青とあたたかい茜色が、水彩絵の具みたいに混ざっていくのがおもしろかった。一面が茜色に染まると、徐々に端から群青色の夜がやってくる。

夜の帳が下りるって、こういうことを言っただろうか。ああ、きれいだな、と面白味もない表現かもしれないけれど、私はそう思った。

椎名葵。それが私の今日までの隣人の名だった。明日からは新しくマンションに住み、新しい隣人ができる。同じように、私たち一家の手放したあの家に誰かが越してきて、新しく葵の隣人の顔をするんだろう。

「ちよつと、いや……かもなあ……」

空を仰いだまま小さく呟いた言葉は、冬の空気にあっけなく溶けて行った……。

「繭子」

——はずだったのだが、振り向くとそこには今まで考えていた人の姿があった。

「葵？何でこんなところにいるの？」

正直飛び跳ねそうになるほど驚いたが、驚きすぎて声も出せなかったことに感謝感謝だ。

「それは俺が聞きたいぐらいなんだけど……。隣いいか？」

どうぞ、と少し端へ寄って、ベンチに薄らと積もっていた雪を払った。

さっきの独り言、聞かれてなかったかな。いや、聞こえていたら葵は『何が嫌なんだ？』とか聞いてくるだろうし……。葵何時からいたんだろう。まさか私、葵の名前乙女チックに呟いたりしてない

よね！？いや、葵なら多分……と自問自答を繰り返していると、葵が『おじゃまします』と腰を下ろした。ベンチが少し音を立てて鳴って、葵の重さだけ沈んだ。

恥ずかしながら、私はそんな意味のわからないことでもどきどきしてしまった。

「まさか繭子もここを知ってるとはな」

ということは、葵も前からここへ来ていたのだろうか。——会わなかったけど。

「それはこっちのセリフ。かなりの穴場だと思ってただけだなあ」
私はそう言って、空を見上げた。思った通り、星空は美しかった。
「冬は夏より星が綺麗ね」

葵も空を見上げる。今日の空を眺めていると、夜が暗いなんてことが信じられなくなる。太陽よりも月よりもずっと小さく見えるけれど、星はこんなにも明るい。

「今日ね、朱里がすごい目腫らしてきたの。しょうがないから一緒に保健室行って、冷やしてもらったら大分良くなったんだけど」

ふと朱里のあの情けない顔を思い出して、笑ってしまった。

「ああ、美鳥が言ってた。昨日は泣いて大変だったらしいぞ」

「ふふ、日野君も大変ね。しかもその後後輩の子に告白されて、あの子また焦っちゃって、『私は繭子ちゃんのが好きだからお付き合いはできません』とか言って、誤解されて半泣きになって、もう最後までやらかしてくれたわ」

「ああ……かなり想像できるな」

葵が苦笑した。

葵はぱっと見、寡黙そうに、もっと言うと人形みたいに冷たそうに見えたりするけれど、笑うと右の眉だけちょっと下がって、ごくあたたかみのある顔立ちになる。

たかが苦笑でこんなこと思ってるようじゃ、私も相当だな。

自分に自分で苦笑いしてから、久しぶりにちゃんと、真っすぐ葵の目を見た。

もうすぐ、お別れなんだから、出来るだけ悔いのないように。

「あんたとも付き合い長かったけど……結構楽しかったわ。——特に、小学校の帰り道であんたが側溝にはまったときとか、上から降ってきたバケツの水で身体半分だけ水浸しになったときとか……」
「おい待て、お前だって転んで田んぼに落っこちておたまじゃくし飲み込みそうになったり、トンボ追いかけて土手転げ落ちたりしてただろ！」

「あのときの葵、ものすごい顔して走ってくるから面白かったわ」
「当たり前だろ！なのにお前ときたら『いたたた……ぶ、葵そのかおもしろいよ』とか言いやがるし！」

だって面白かったんだもん。綺麗な顔を馬鹿みたいに歪めて走ってきた姿が。

「自分だってドッチボールで顔面直撃して脳震盪でたおれたとき、心配してたあたしに目覚め早々『お前、アホ毛立ってるぞ』とか言ってきたじゃない！」

「それならお前だって……！」

うら若き乙女に向って、アホ毛とはなんだ、アホ毛とは。

しばらくやいやいと言い合って、いろんなことを思い出して、おかしくなって笑った。

うん、幸せな15年間だったな。

彼女の思惑 4

「多分大学は、西町のところ受けると思うから、縁があったらまたそのときにでもよろしく」

西町にある大学は、葵が受けるつもり在大学だ。総合大学だし、朱里もいる。まだやりたいことがはっきりしない私だけど、昔からあの大学には憧れがあったし、自分の意志で行きたいと思える。

まあ、葵がいるってことが、かなり私のやる気を出させてくれるであろうというのは、わかってはいるけれど。

私の行く高校には、葵はいないんだ。明日の朝が過ぎたら、きっと葵にはなかなか会えなくなる。そう考えたら、やっぱり寂しい。「——あたしお母さんに買い物頼まれてるから、そろそろ行かないと」

嘘です。本当はそんなこと頼まれていなかった。でもこの流れから行くと、一緒に帰ることになるだろう。今日は、一人で帰りたい気分だった。——なんだか、家まで持ちそうにないし。私は枕を濡らすよりも、人気のない道を歩きながら涙を流す方が好きだった。

「どこのスーパー行くんか？もう暗いし、送ってくよ」

葵も私に続いて立ち上がった。

——いつもならありがたいと思うところだけど、今日に限っては大変迷惑です！

「まだ早いし、他にも寄りたいところあるから大丈夫。遅くなったらお母さんも迎えに来てくれると思うし」

一人頬を濡らしながら歩きたい夜もあるのだ、乙女には。けれど葵は、尚も食い下がった。

「寄り道ぐらい別にいい。冬は暗くなるの早いんだから、あんまり一人でうろちよろしい方がいいぞ」

馬鹿、察しろ——いや、察されたら困るのか。

私は努めて冷静に言った。

「本当に平気よ。すぐ帰るから。……あんたは黙ってお家に帰って、その取れちゃったボタンの跡でも眺めてなさい」

「——おい」

あまり見たくはなかったが、気づいてしまったものは仕方がない。私だって出来れば、第2ボタンほしか——じゃなくて、ええと、卒業式に告白する人って、意外と多いのね。

葵の場合、彼女ができたらずまず間違いなく私には教えてくれるはずなので、付き合ったりはしていないはず。話に出しても言わないってことは、まず間違いはない。だって1年前彼女ができたときには、すぐ報告された。——私、何自虐まがいの報告しているんだろうか……。

その子と葵が別れたのは、半年以上たってからだった。いつも通りの澄ました顔で何でもない風に別れたと言ったあいつに、これまた何でもない風を装った私がなぜかと聞くと、彼女は『部活ばかりでかまってくれないから』と、告白したときと同じく勝手に言うて勝手に去っていったそう。コイツ部活バカだしなあ……。ちなみにその子は、学校でも3本指に入るくらいかわいい子だった。葵の面食い。

「おもてになる葵君なんかを送ってもらっちゃったら、女子たちに恨まれちゃうものね。それじゃあまた明日ー」

ふざけた風に言って、ひらひら手を振る。これで引きさがる葵ではない。多分もう一回くらいは呼びとめられるだろう。

「おい、待てよ」

予想通りだった。ちらりと振り向くと、葵が眉をしかめ、なんだか心配そうな顔をしているので、私は本当に泣きそうになってしまった。

「もう、心配性ね、平気だってば。じゃあね」

頭の中で、なるだけ自然に振る舞えるように瞬時にシュミレーションして、笑って、もう一度ひらひらと手を振った。そして、肩がふるえないように気をつけて、走り出してしまいたい気持ちを押

し込めて、いつもよりむしろゆっくりなくらいに、さくさくと雪を踏んだ。

これで、きつとおしまい。あとは明日、他愛もない別れのあいさつを交わして、私とこいつのお隣さん生活はおしまい。あとは勉強して、大学へ行つて。

ある意味賭けだった。もしかすると葵はあつさり志望大学を変えてしまうかもしれないし、彼女ができているかもしれない。いいんだ、別に今葵と付き合いたいなんて考えているわけではない。葵もきつと高校へ行ったらモテるだろうし、彼女もできるかもしれない。それでも私が諦めない限り、チャンスは残っているのだ。せいぜい楽しい高校生活を送って、男を磨いてくると良い。

——まあ、嫌なだけだね。

でも私だって、今より可愛らしくなつて、葵を驚かせてやる。

この引越は、幼馴染でしかない私たちの関係を作りかえるためのきっかけなのだ。そう思わないと、つらくてたまらなくなってしまうから。

——そのときの私は、涙でばやける視界をなんとか確保して、拭いたら葵にばれてしまうかもしれないので、情けなく涙を垂れ流しながら、本当に頑張つてこらえてゆつくり歩いていた。

なので、後ろから近づいてきたさくさくという音には、全く気付かなかつたのだ。

「繭子」

腕を掴まれて、びくつと身体を揺らしてしまった。ま、まずい……。

…。

「あんたもしつこいわねえ。だから、大丈夫だって……」

声が揺れないように、かつ割と碎けた風に言う。私って、可哀そうなくらい何でもないふりが上手いな……。

「繭子、ちよつとこつち向け」

——なんで？

背中に葵の訝しげな声がぶつかった。葵は私の様子を、おかしい

と思っている？

そんな、ばれているはずがない。私の演技は誰にも、それこそ親にも見抜かれたことがなかったのだが。

焦って思わず腕を振り切って走ってしまおうとしたが、まゆこ、ともう一度名前を呼ぶ声が、その声があんまりきれいだったので、もう逆らえなかった。

私は最後の抵抗として、出来る限りゆっくりと、目線だけで振り返った。

彼女の思惑 5

「……………」

「……………」

一瞬のち私の腕を掴んでいた力強い掌は離された。

葵は、かつて見たことないほどに目を見開いて、ついでに口もぽかーんと開けて、実にアホっぽい顔で私をまじまじと見た。

——一応言っておくが、今の私の顔も相当まずいことになっているということは、ちゃんと分かっている。

「——せめてなんか、言いなさいよ」

私が言うつと、葵は困ったような、でもなんだか楽しそうな顔をした。

「…………いや、まさか泣いてるとは思わなくて……………なんか、珍しいもの見ちまったな」

女子の泣き顔を見た反応がそれか！もっと、なんかこう……………ないの、かな？別に涙は女の武器、とか思ってるわけじゃないけど、もう少しこう、なんか……………ね？

なんて気持ちはおくびにも出さず、私はむっとした顔を作って葵を見た。

「何、その反応。これはあれよ、昨日読んだ感動的超大作の結末をちよつと……………」

「嘘だな」

即答する葵。まさか、こんなので騙せるとは思っていない。——でも騙されてほしかった！

「まーゆこ」

……………。——なにその呼び方！私は幼女か！？まーゆこだって！まーゆこ……………って何繰り返してる私！

「どうしたー、ほら。こわくないから言ってごらーん」

ははは、とおどけて両手を広げた葵が笑って言う。ち、ちくしう……照れるな私、照れるな私！もう、いい加減自分に自分で突っ込むのやめたい！

「この、ばか、何言ってるのよ」

私が眉を寄せて言う、葵は不思議そうな顔で笑った。

「え、なに照れてんだよ。お前変わったやつだな」

――ばれた。辛うじて、『泣いてる女の子見て笑うなんて、あんたも変わった趣味だわ』とか可愛げもなく呟いてやったけど……せめてもうちょっと、可愛いこと言いたかったな……。

私は小さい頃は鍵っ子で、幼い時に両親に甘えた記憶がなかった。なんとなく、すっかりしなくてはいつも思っていたので、こういう扱いをされるとどうしていいかわからない。ただ、それだけのこと。

「ほらほら、いい子だから言うてごらん。お兄さんが聞いてあげよう。ん？」

――お願いだから、そんな風に私を甘やかさないでほしい。

私はいつも、冷静でしっかりした人でありたかったし、たいていの場合は、自分の可能な限りそう出来ていたと思う。

でも、葵といると駄目なのだ。葵といると、どんどんわけがわからなくなつて、ぐちゃぐちゃになつて、理想とする自分が崩れていく。

それなのに、葵のそばにいたいなんて。

本当に、私はどうかしている。

「まーゆ、まゆちゃん。まったく、なーに泣いてんだよ」

葵がくしゃつと顔をゆるめて、私のことを見る。

『まゆ』、葵がそう私のことを呼んでいたのは、もうずっと昔のことのように思える。あのころは、葵だけが私を『まゆ』と呼んでくれていた。あの頃の葵はもっと背が小さくて、私が横を向くといつもすぐ葵の顔を見ることができた。私たちはおんなじ目線で、おんなじものを見て過ごしていた。よく2人で遊んだし、昔は私も、

今よりも少し素直な子だった気がする。

いつからなんだろう。葵が私を『まゆ』と呼ばなくなつて、私も葵をあおくんと呼ばなくなつて。

あの頃からもう1度やり直せたとしても、私はきつと同じ道を歩んでしまつたろうに。

そんなとりとめのないことを思い始めたら、ぼろぼろ涙はこぼれるし、目の前に葵はいるし、なんか、どうした？みたいな優しい顔してるし……。私はだんだん自分が何を考えているかわからなくなつてきて、ぐちゃぐちゃの頭のまましゃくりあげてしまった。

「ちょ、ちよつと、寂しくなつたのよ。いろいろ思い出して、寂しくなつたの。高校に行ったら、朱里もいないし、隣にあんたもいない。それで、あんたたちは、あたしのいない高校で、彼女作つたりしながら、面白おかしく過ごすのかつて、思つたら……。ちょ、ちよつと、さみしくなつたの。それだけ。……。こ、子供みたいだけど、仕方ないじゃない」

どんなに頭が働いていなくとも身体は自然と平静を装おうとしていて、慣れつてすごいなあと他人事のように思った。——けれど、どうも手が落ち着かなくて、気づくと子供みたいにスカートを握りしめてしまつていた。

ぱつと手を離してちらりと葵を見ると、葵も私の目を見ていた。

——ば、バレてないよね、多分……。

葵は気にした風もなく、私の好きなあのあつたかい笑顔で、私に言った。

「そつか、俺に会えなくなるのがそんなに寂しいか、ははは。お前もちよつとはかわいらしいところあつたんだな」

「——そりゃあ、10年以上お隣だったんだし、当たり前でしょ」
「かわいらしいといわれた。——どうしよう、もう……。見たいのに、すごく見たいのに、葵の顔がぐにやぐにやに歪んで、よく見えない。嬉しくても涙は出るものだって、このとき初めて知った。もうそうでなくとも、葵になら何を言われたつて泣いてしまつたろう。今

日の私の涙腺は、すでに破壊されてしまっている。

「うん、よしよし。泣け泣け、もっと泣け！」

子犬をかわいがるみたいに笑って、葵は両手で私の頭を撫でた。

男の人に頭をなでられたのは、生まれて初めてだった。

頭をなでられるって、こんなに気持ちがいいものだったんだ。身体から力が抜けて、すごく安心する。でも心臓はどくどくと鳴って、むずがゆくてたまらなくて、逃げ出してしまいたくなる。

「髪！ぐしゃぐしゃになる！」

これ以上こんなことをされたら、本当にどうにかなってしまいそう。私はそんな可愛くない、もっともらしいことを言って逃げ出そうともがいた。けれどそうすると葵は、腕をつかんで抱え込むようにして、もっと私のことを引き寄せようとする。葵の指先が、火照った頬に、瞼に、耳たぶに触れて、その冷たい指先に、ひゃ、と女子みたいなひきつつた声が出て——いや、あたし女子だった、でも本当に恥ずかしかった。

「はは、ゆき、ぬくいな」

もともと低体温な葵の指が、私の頬を滑った。

——もう、どうにでもなってしまう。

今日はもうとんでもない失態を見せてしまっているし、今更取り繕っても惨めなだけだ。もう少しだけ、この指先に触れられていても、いいのかもしれない。

私は考えるのをやめて……今だけ、と自分に言い聞かせながら、素直に頭をなでられていた。

彼女の思惑 6

そのあとどうやって家に帰ってきたのかは、実はよく覚えていない。ただ『危なっかしい奴だな、お前』と私の手首をつかんだ掌の大きさは、よく覚えている。

この指先が、さっき私の頭を撫でて、頬に、瞼に触れていたんだ——とか考えてしまつて、また熱がぶり返してきて……。もういっそ、変態と呼んでください……。

とりあえず私が今やるべきことは、赤くなつてしまつた瞼を冷やすことと、明日平然とあいさつするためのシミュレーションである。

——部屋で一人、葵の写真を張り付けた鏡に向かってひたすら話しかけ、悶える私は、さぞかし滑稽であつたらう。

翌日、瞼は思ったほど腫れず、練習の甲斐もあつて私はいつも通りに葵に別れを告げることができた。そのうち連絡でもするわ、なんてそつけなく言いながらも少し泣きそうになつたけれど、私にとつて平然を装うのはライフワークみたいなものだ。——昨日がちょっと、例外だつただけで。

新しいマンションは今までの家よりずっと新しくて、綺麗すぎでなんだか違和感があつた。でもきつと、これくらいすぐ慣れる。新しい学校へ行って、新しい友達を作つて、私はきつと素敵な人になつてやるんだ。葵には、負けていられない。

なんとかひと段落着き、私はベッドに寝転がって、じつと携帯電話のディスプレイを見つめる。

「……………」

——連絡すると言つた以上、するのが礼儀であらう。そうそう、

嘘はいけないよね、親しき仲にも礼儀ありって言っし！……とまあ、そんな風に誰にかもわからないような言い訳をして、私はメール画面を開いた。

私ははつきり言っただけメールというものが苦手だ。元々考え込む癖のある私は、いつもどんなふうに文面を作った方がいいのか考え込んでしまう。声とは違って微妙なニュアンスを伝えるにいいし、まあもつと気楽に考えたらいいんだろうけど、後に残るものに対しては慎重になってしまいう性分なのだ。——相手が葵なら、なおさらのこと。というわけでいつもより更に頭を悩ませながら、打っては消し打っては消しを繰り返していた私の携帯が、突然震えた。びっくりしたが、電話が来たようである。文字を打っていたのですぐに通話画面になってしまい、慌てて耳にあてがった。

「は、はい、繭子です。どなた様ですか」

少し緊張しながら私が言つと、ふ、と小さく笑う声がした。この声、笑う方、もしかして……

「さて、誰でしょう」

「——あ、葵！何の用だ！」

頬が火照るのを感じて、私はちよつと声をひっくり返してしまつた。そのことが恥ずかしくて、また身体の温度が上昇する。

この間からなんだか私の身体はおかしい。まだ、あの日の余韻が残っているからなんだろうか、ちよつとした時に葵のくしゃつとした笑顔と……それだけならまだいいけれど、あのひんやりとした指先の触れる感覚を思い出して、1人勝手に悶える癖が付いてしまった。なんか、変態っぽくていやだ……。それとも恋つていうのは、こういうものなんだろうか……。

「ひでーなあ。連絡するって言ったから、待ってるのが筋かなーと思っただけどさ、なかなか連絡寄越さないし。またみーみー泣いてるのかなーって心配してやったのに」

「泣いてないわよ！もうその話しないで！」

もう頼むからやめてくれ！と私は大きな声で言つ。今願いが1つ

だけ叶うのなら、葵の記憶からあの日の出来事をきれいさっぱり消し去ってしまいたい……。

でも、私はあの日のこと、恥ずかしいけど、枕に抱きついて叫び声を上げて両親に心配されるほど恥ずかしかったけど、それでも、やっぱり覚えていたいと思うてしまふ。照れくさくって情けなくって全然格好良くなくて、でも、あつたかくて大切なもの。——人はきつと、これを恋って呼ぶんだろう。

「どうした？本当に泣いてんのか？」

突然黙り込んだ私に、からかいと心配の入り混じったような口調で葵が問いかけてくる。

私は反射的に『泣いてるわけじゃないでしょ』と言おうとして……ちよつと迷ってから、大変きこちなく『う、うえーん……』と泣き真似をしてやった。

——いいんだ、今はスカートの裾掴もうが枕を叩こうが、誰も見ている人はいないんだから。

私の珍しい行動に驚いたのだろうか、少しの沈黙の後、葵はぶつと吹き出した。

なに笑ってんのよ、と不機嫌そうに言いながら、私は少しだけ拗ねてみる。もはや15年間の癖で、可愛げのあることをする方が、冷静でいるよりずっと気力をすり減らしてしまう私だけねど。

——これからはもう少し、もう少しだけ、弱い自分とも、情けない自分とも、上手く付き合っていけたらなあ。

そんなことを思つて、私はそつと目を閉じる。

「まったく、変なやつだな。——まあ、昔っから変なやつだったか。

繭子も、俺も」

——はは、と電話越しに笑う彼の声がもう懐かしくて、ちよつとだけ涙ぐんでしまったのは、絶対に秘密だ。

彼女の思惑 6（後書き）

まずはここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます！
なろうさんではたくさん華やかなお話がある中、このような地味（笑）な話にはたして需要があるのかというのは、若干気になっていたのですが、少しでも楽しんでいただけたのなら嬉しいです。
設定上仕方なかったのですが、この子たち中学生なんですよね……
なんかやけに達観した子たちになってしまいました……。
しかしこのお話で書きたかったのは繭子が自分にやきもきするところなので、とりあえずは満足です^^笑

本編はここでおしまいですが、番外編というか、おまけみたいなものももう少しだけ続きます。よろしければお付き合いください！
拍手や感想なんかもいただけると、とてもうれしいです！
読んでくださってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9653x/>

彼と彼女の思惑

2011年11月4日21時10分発行